

# 「大唐勿部將軍功德記」と天龍山石窟の唐代窟について

神谷麻理子

## On "THE GREAT T'ANG DYNASTY GENERAL'S GOOD DEED CHRONICLE" and T'ang Dynasty Caves of Tian Long Shan Grottoes KAMIYA Mariko

Tian Long Shan Grottoes is a Buddhist Cave temple which was initially constructed during the Eastern Wei Dynasty and it is located on the outskirts of Tai Yuan City in Shanxi Province, People's Republic of China. The temple complex was built intermittently during the Northern Qi and Sui Dynasty and entered the height of its prosperity during Tang Dynasty. I have previously written an article about the research history and study of the Tian Long Shan Grottoes published in the Bulletin of Aichi Prefectural University of Fine Arts And Music in 2004 (vol.34) and I also wrote about the Northern Qi Dynasty Caves of Tian Long Shan Grottoes in the Bulletin of Aichi

Prefectural University of Fine Arts And Music in 2005 (vol.35).

In this article we will focus on the inscription of "The Great Tang Dynasty Generals Good Deed Chronicle" which has a specific year reference regarding the Tang Dynasty Caves of Tian Long Shan Grottoes. "The Great Tang Dynasty Generals Good Deed Chronicle" recounts that a cave was excavated in 707 but it is not known exactly which cave. We will estimate the original location of the inscription and examine the excavation of the Tang Dynasty Caves described in the "The Great Tang Dynasty Generals Good Deed Chronicle".

はじめに

中国山西省太原市の郊外に位置する天龍山石窟は、東魏乃至は北齊にかけて開鑿が始まった仏教石窟寺院である。造営は次の隋にも継続し、やがて唐には最盛期を迎える。現在、窟番号を有するのは合計二十一窟であるが、唐代開鑿と思われる窟は、その半数以上を占める。

天龍山石窟の唐代に造立された仏像群は、優美で写実性あふれる、独特の作風をもつものが多く、中国仏教彫刻史上、看過することのできない存在として高く評価されている。しかし、保存状態が頗る悪く、しかも創建に関する文献史料が乏しいこともあり、具体的な窟の造営年代については未だ解決をみない。

筆者はこれまで天龍山石窟の研究史、そして天龍山石窟の北齊窟について私見を述べてきた<sup>(1)</sup>。本稿では、近年注目されつつある、唯一の天龍山石窟唐代造営に関わる史料「大唐勿部將軍功德記」(以下「功德記」)を取り上げ、そこに記される神龍二年(七〇六)発願、同三年(七〇七)完成の唐代窟について、若干の考察をおこないたいと思う。

## 一 「大唐勿部將軍功德記」の概要と「勿部將軍」について

本「功德記」は、もともと天龍山石窟の某所に置かれていた碑文であったが、現在、碑そのものは残存しておらず、碑文の部分的な拓本が、中国北京図書館に所蔵されている。しかし、その内

容については、清代以降の金石著作類のいくつかでふれられており、比較的注目されてきた史料であったことがうかがえる。

『金石文字記』の編者、顧炎武は、本「功德記」について、「今在太原縣天龍寺後、將軍名珣、其氏曰□部、而部上闕一字、官至天兵中軍副史右金吾衛將軍、上柱國開國公、與其夫人黑齒氏造像之記、其文曰本支京(東)海、世食舊德、相虞不臘、之奇旅行、太上懷邦、由余載格、蓋蕃將之歸唐者也」と紹介している<sup>(3)</sup>。以後、「□部將軍功德記」として表記されてきたが洪頤煊の『平津讀碑記』巻五で「□部」を「勿部」と一字を補ってからは、「勿部將軍功德記」として通称されるようになった。従って、本稿においても、「勿部將軍功德記」として扱っていききたい。

まずは王昶撰『金石萃編』巻六八に掲載される本「功德記」を、文字等を補いつつ引用する。なお、本「功德記」については、小野勝年氏がすでに和訳を試みておられ、その功績に拠ったところが大きい。

### 大唐□部將軍功德記

郭謙光文及書

咨、故天龍寺者。兆基有齊、替虐隋季。蓋教理歸寂、載宅茲山之奥。龕室千萬、彌亘崖岬。因广増修。世濟其美。夫其峯巒宏礫、丹翠含緞、灌木蕭森、溢泉霽沸。或叫而合鑿。誼諱者、則參虛之秀麗也。雖緇徒久曠、禪廡荒闕、而邁種德者、陟降遐險、固無虛月焉。大唐天兵中軍副使・右金吾衛將軍・上柱國・遵化郡開國公□部珣、本枝東海、世食舊德、相虞不

臘、之奇旅行、太上懷邦。由余載格、歷官內外。以貞勤、驟徙天兵重鎮、實佐中軍。于神龍二年三月、與内子樂浪郡夫人黑齒氏、即大將軍燕公之中女也。躋京陵、越巨壑、出入坎窞、牽攀莖蔓、再休再咽、迺詹夫淨域焉。於是接足禮已、卻住一面、瞻規口歷、歎未曾有。相與俱時、發純善誓、博施財具、富以口上。奉為先尊及見存姻族、敬造三世佛像并諸賢聖、刻彫妙相、百種莊嚴、冀籍勝因、圓資居往。暨三年八月、功斯畢焉。夫作而不記、非盛德也。遵化公資孝為忠、性義而勇、顛領以國、蹇連匪躬、德立口行、事時禮順、塞既清只、人亦寧只。大蒐之隙、且閱三乘。然則居業定功、於斯為盛。光昭將軍之令德、可不務康。故刻此樂石、以旌厥問。其辭曰、口鑠明德、知終至而。忠信孝敬、元亨利而。摠戎衛服、要荒謐而。乘緣詣覺、歸口口口。

大唐景龍元年歲在鳥鵲首、十月乙丑朔、十八日壬午建。

口部選宣德郎昕、次子吏部選上柱國暉、次子上口口口、

次子口兵部選仲容、公聿天兵口軍總管口義。(傍線筆者)

続けて、前掲『金石文字記』部分と、『潜研堂金石文跋尾』の引用があり、さらに王昶の注記が以下のように記される。

按此碑前題、郭謙光文 及書、獨用篆字而文則隸書體之異者也、文云與内子樂浪郡夫人黑齒氏、撰文人稱人之妻曰内子、亦初見此碑末行記、其子又及其壻、亦與他碑異例、黑齒氏為百濟複姓、唐書諸夷蕃將傳有黑齒常之、為百濟西部人、是高宗平

百濟後歸朝者、夫人其中女也。(傍線筆者)

本「功德記」は、郭謙光によって撰文され、神龍二年三月に天兵中軍副使・右金吾衛・上柱國・遵化郡開国の肩書きをもつ「勿部珣將軍」が、その夫人である黒齒氏とともに天龍寺(天龍山石窟)を訪れ、先祖、及び姻族のために三世仏、及び諸賢聖像の造立を発願し、翌神龍三年八月に完成、同年(景龍元年、九月に改元)十月十八日に碑を建立したことを伝えている。

撰文者郭謙光が如何なる人物であったかは明らかでない。また、発願者勿部珣についても詳細はわからないが、右金吾衛は宮中及び城下の警護を司る軍職で、『旧唐書』卷四十四、『新唐書』卷四十九等にその名がみえる。また、上柱國、遵化郡(現在の河北省の地方にあたる)開国公という肩書きからしても、かなりの実権をもった將軍であったことが想像できる。

一方、勿部珣將軍の夫人「樂浪郡夫人黒齒氏」は、ある程度の氏素性がわかる。碑文中「大將軍燕公」とは、王昶の注記によると黒齒常之のことで、勿部珣將軍夫人はその娘にあたる。黒齒常之は、百濟西部出身の有能な軍人で、高宗の百濟討伐を機に入唐吐蕃や突厥討伐に軍功を挙げるなど、勇躍した人物として知られる(『旧唐書』卷一〇九、『新唐書』卷一一〇)。

小野勝年氏は、勿部珣が「東海」の出身であることについて「黒齒常之の關係を合わせて、先づ半島の百濟が考えられ、世食旧徳により、世襲貴族の生まれをうかがわしめる。」とし、さらに「珣が常之の女婿になったのは果たして何時頃か明らかにするをえ

ないが、神龍中、天兵軍副使に任じたときはすでに男子昕・暉等が軍職につき、女婿の口義も同軍の総管に任じていたから、本人は働き盛りの年齢に達していたであろう。」とする<sup>(8)</sup>。

なお、碑の形状については、王昶によるものか、首題に「碑高四尺五寸、廣三尺七寸、十八行三十一字隸書郭謙光一行篆書在太原縣天龍寺後」と注記されている（前掲『金石萃編』）。子どもの背丈程度の、比較的小さな碑であったようである。そして、注目すべきは、前掲『金石文字記』にも見える碑の所在地「天龍寺後」の記載であるが、この件については後で少しふれたい。

## 二 従来の見解

これまで、本「功德記」と天龍山石窟との関係について言及した研究者は、決して多いとはいえない。最初に両者の関係について着目したのはマリリン・リーで、本「功德記」の英訳を試み、勿部珣夫妻が造立した窟は、第二十一窟にあたる<sup>(9)</sup>と提言した。

第二十一窟を、本「功德記」にいう、すなわち神龍二年三月から翌三年八月造営窟とする理由は、様式研究に拠るところが大きい。作例として、長安三年・四年（七〇三・四）の年号を記す宝慶寺出土の仏龕や、書道博物館所蔵の景雲二年（七一）銘阿弥陀如来坐像、ペンシルバニア大学付属博物館所蔵の神龍二年銘菩薩立像などを挙げ、第二十一窟諸像の様式と接近していることを述べた上で、本窟の造立は長安三年から景雲二年の間とし、天龍山石窟唐代窟の中でも、最初期にあたる<sup>(10)</sup>とした。

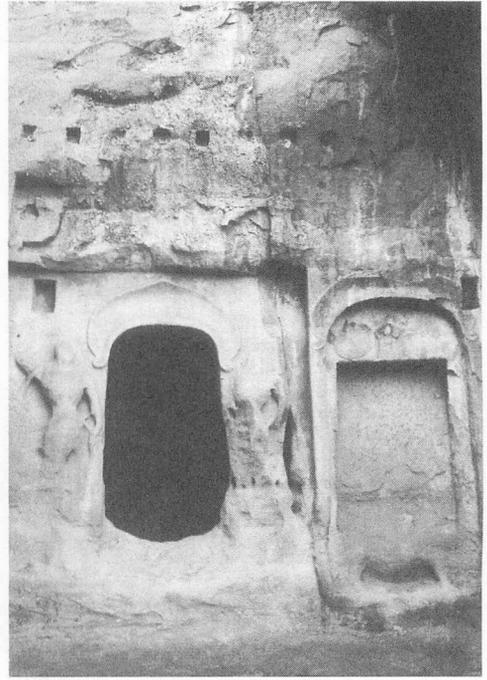
次に、前掲の小野勝年氏が、マリリン・リーの論考を受け、資料紹介として本「功德記」についてとりあげたが、内容の中心はあくまで碑文そのものの解釈で、天龍山石窟における原所在地まではふれられなかった。しかし、天龍山石窟における本「功德記」の重要性について「造像記の所在が確定すれば、仏像の製作年代も明らかにされ、様式の基準を提供する。中国金石家が果たして、悉く現場に到って録したとは思われないが、恐らくは、当初、石窟の入口に、この碑記が嵌入されたのではあるまいか。」と追記している<sup>(11)</sup>。

なお、小野勝年氏は、マリリン・リーのいう「第二十一窟」を「十九窟」と誤解して記しているため、修正の必要があることを指摘しておきたい。

その後、顔娟英が「天龍山石窟的再省思<sup>(12)</sup>」で、本「功德記」について取り上げ、やはり様式研究の見地から、碑の原所在地、すなわち勿部珣將軍夫妻造立の窟を推定した。

顔娟英は、天龍山唐代窟に多く見られる三壁三仏の構成を持つ窟は合計九窟あり、碑文中の「三世仏」造立も含め、これらの造像背景には、華嚴思想があることを指摘した。そして、マリリン・リーが勿部珣將軍の造立窟を「第二十一窟」としたのに対して、神龍二年から同三年という年代を考えると、第六窟にあてることが相応しいと述べた。

さらに近年の見解としては、天龍山石窟に関する論考を数多く出している、李裕群の発表がある。李裕群は、現地調査の成果をもとに、現在天龍山石窟唐代窟のうち碑の痕跡を残すものを選定



第15窟門口と碑の痕跡

し、その中から本「功德記」碑の原所在地を推定しようと試みた。その結果、最も適合するのは第十五窟<sup>(13)</sup>で、しかも、「三世仏」の条件に見合った三壁三龕の構造をもち、様式的にもあてはまることから、勿部珣將軍夫妻の造立と見なすべきであると言及した。

以上、現在のところ、本「功德記」が刻まれていた碑の原所在地、つまり神龍二年から同三年の造立窟は、第六窟、第十五窟、第二十一窟の三説が挙げられる。

### 三 天龍山石窟の唐代窟と碑の原所在地

天龍山石窟唐代窟で、本「功德記」に記載された条件を充たす窟は、果たしていくつあるのか。

天龍山石窟は、殆どの窟が盗掘、もしくは風化によって原形を

留めていないため、様式的な判断をおこなうことは容易でなく、大規模な破壊以前に撮影された写真、及び世界中に散在する、部分的な仏像彫刻から考察せざるを得ない。

「功德記」に記載された造像の状況について、はつきりと分かることは、三世仏、及び諸賢聖像を造立したことである。通常、石窟内で三世仏を配するならば、門口となる方角以外の壁面中央に、一体ずつ如来像を置くことが自然であろう。さらに「諸賢聖」とならば、その両側に何体かの脇侍が並んでいた可能性が考えられる。但し、「諸賢聖」が菩薩なのか、羅漢なのか、もしくはこれら両者を記すのかは分からない。また、門口両側に仁王像を配する例も多くみられるので、それらを含めるとも考えられる。

表1に、唐代窟内の構成と規模の概略を記した。天龍山石窟は、第十九窟と第二十窟以外、南面して穿たれているため、北壁が正壁、東壁が左壁、西壁が右壁となる。これら十五の唐代窟の中で、三世仏、及び諸賢聖像を造立した痕跡をもつ三壁三仏構成の窟は、第六窟、第十一窟、第十二窟、第十五窟、そして第十七窟から第二十一窟で、前掲の顔娟英が指摘したように九窟を数える。

では、九窟のうち、勿部珣將軍夫妻の造立に適さない窟はどれか。まず、窟の大きさから見た場合、第十一窟と第十九窟が挙げられよう。これら二窟は、施主である勿部珣夫妻の地位や財力を考えた場合、あまりに小規模すぎると思われるからである。

繰り返しとなるが、神龍二年三月、勿部珣將軍夫妻は、「越巨壑、出入坎窞、牽攀荃蔓、再休再咽、迺詹夫淨域焉」、つまり、険しい谷を越え、窪地を出入りし、草木を押し分けながら漸く淨域(天

表1 天龍山石窟唐代窟内の構成・規模の概略

窟	北壁(正壁)	東壁(左壁)	西壁(右壁)	窟(主室)内寸法
4	羅漢・中尊・羅漢	菩薩立像・脇侍	菩薩立像・脇侍	1辺約1.4m、高さ1.9mの正方形
5	中尊	脇侍・(比丘?)	脇侍	幅1.4m、高さ1.3mの仏龕形
6	羅漢・中尊・羅漢	菩薩立像・仏倚像・脇侍	脇侍・仏坐像・脇侍	1辺約1.3m、高さ1.3mの方形 (門口両側に仁王)
7	羅漢・中尊・羅漢	脇侍	脇侍	幅90cm、奥行70cm、高さ1.2mの方形
9	(上層)大仏倚像	(下層)十一面観音立像	(下層)普賢・文殊	上下二層構造、大仏倚像は高さ7.3m、十一面観音立像は高さ6m
11	羅漢・中尊・羅漢	菩薩・仏倚像	仏坐像・菩薩	幅70cm、奥行84cm、高さ90cmの方形
12	羅漢・中尊・羅漢	脇侍・中尊・脇侍	脇侍・中尊・脇侍	幅1.4m、奥行1.2m、高さ1.7mの方形 (門口両側に舍利塔)
13	脇侍・中尊・脇侍			幅63cm、高さ75cmの仏龕形
14	脇侍・中尊・脇侍	脇侍・中尊(菩薩半跏)	中尊(菩薩半跏)・脇侍	直径3.6mの円形
15	脇侍・中尊・脇侍	脇侍・中尊・脇侍	脇侍・中尊・脇侍	幅2.4m、奥行2.1m、高さ2.1mの方形 (門口両側に仁王)
17	脇侍・中尊・脇侍	脇侍(坐像)・脇侍(立像)・中尊・脇侍(立像)・脇侍(坐像)	脇侍(坐像)・脇侍(立像)・中尊・脇侍(立像)・脇侍(坐像)	幅2.0m、奥行2.0m、高さ2.1mの方形 (門口両側に仁王)
18	脇侍(坐像)・脇侍(立像)・中尊・脇侍(立像)・脇侍(坐像)	脇侍(立像)・脇侍(坐像)・中尊・脇侍(坐像)・脇侍(立像)	脇侍(坐像)・中尊・脇侍	幅2.1m、奥行2.6mの方形
19	(東壁)羅漢・中尊・羅漢	(南壁)菩薩・仏倚像	(北壁)仏坐像・菩薩	幅1.2m、奥行1.1mのほぼ円形
20	(東壁)羅漢・中尊・羅漢	(南壁)菩薩・仏倚像・文殊	(北壁)普賢・仏・菩薩	直径3mの円形
21	脇侍・中尊・脇侍	脇侍・(中尊?)・脇侍	脇侍・(中尊?)・脇侍	幅2.4m、奥行2.6m、高さ2.7mの方形

参考：林良一・鈴木潔「天龍山石窟の現状」(『仏教芸術』141号、1987年)、李裕群・李鋼編『天龍山石窟』(科学出版社、2003年)。  
 □は、各壁に如来形の中尊が配される、いわゆる三壁三仏構成の窟を示す。

龍山石窟)に辿り着いたのである。天龍山石窟は、石窟寺院として創建されたため、無論、当初は僧も住していたと思われるが、恐らく、隋の開皇四年(五八四)に第八窟を造立した以後、訪れる者も僅かで、夫妻が礼拝した時には、かなり荒廃していたと思われる。

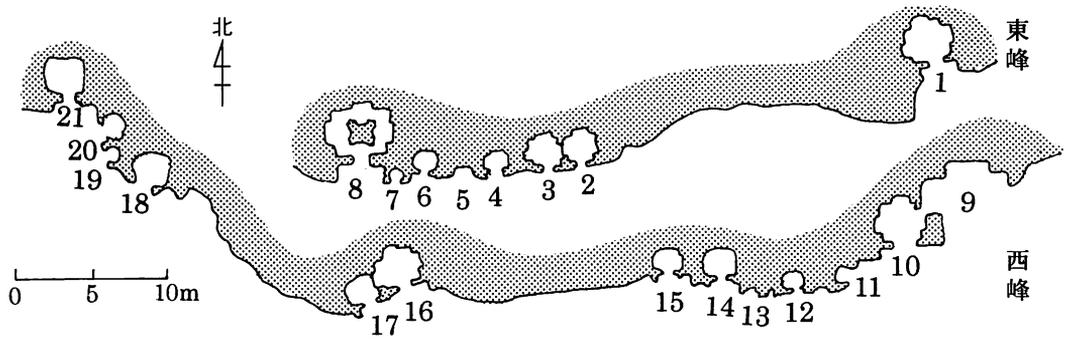
神龍二年は、周を建国した則天武后が没し、再び中宗が復位した翌年にあたる。国に新たな風が吹き始めた頃、勿部珣夫妻は天龍山石窟に登攀し、およそ百二十年ぶりに、この地で仏像の造立を発願したのである。勿論「功德記」がいうように、造立の目的はあくまで先尊、姻族のためであろうが、その背景には記念的事業の意味合いもあったのではないだろうか。そう考えると、彼らが造立した窟は、やはりある程度の規模を備えていたと思われる。続いて残り七窟のうちから、彫刻様式を中心に、神龍二年から同三年という造立年代について考えてみたい。

表2は、唐代窟について、特に具体的な造営年代を提示した、主な研究者の見解をまとめたものである。先学の造立年代と照らし合わせつつ、勿部珣將軍夫妻造立の窟に合わない、すなわち神龍二年から同三年の造立年代から懸け離れる窟を挙げるならば、まず第十七窟ということができよう。

第十七窟の諸像は、全体に形式化しており、他の唐代窟諸像と比べて瑞々しい自由な感覚が欠けている。曾布川寛氏は「八世紀初頭の武周期」とされているが、大方の見解は、唐の絶頂期を過ぎ、下降に突入したころの造立と位置づけている。天龍山石窟唐代造営の中でも、末期にあたる頃と見て大過ないと思われる。

表2 唐代窟造営年代の主な見解 (諸家別)

窟	4	5	6	7	9	11	12	13	14	15	17	18	19	20	21	主な論文・書籍等
研究者名																
Osvald Sirén	唐前期 (700-710年)	唐前期 (700-710年)	唐前期 (700-710年)						唐前期 (700-710年)		唐前期 (700-710年)	唐後期 (710-720年)			唐後期 (710-720年)	Chinese Sculpture from the fifth to the fourteenth century vol. I ~ IV, LONDON (1925).
水野清一	5窟に接近した8世紀初	則天期、700年代初	5窟に接近した8世紀初	唐	(上)五代、(下)唐	開元 (713-741年)頃	唐	唐	玄宗朝 (712-756年)	唐	開元末 (741年)に及んだか	開元初 (713-723年頃)	唐	唐	開元 (713-741年)頃	「唐代の仏像彫刻」(『仏教芸術』9、1950年、『中国の仏教美術』平凡社、1968年所収)。但し、4窟と6窟が混同している。
西川新次	則天末年頃 (700年前後)	則天末年頃 (700年前後)							玄宗初葉 (713年前後)							「新収品研究・紹介 旧長尾氏蔵業師如来坐像と天竜山如来倚像」(『MUSEUM』111、1960年)。
山本智教	8世紀初	7世紀末	8世紀初	8世紀初		7世紀末	7世紀末	7世紀末	8世紀初	8世紀初		8世紀初	8世紀中頃	8世紀初		「天龍山石窟」(『密教文化』55号、1961年)。
HARRY VANDERSTAPPEN・MARYLIN RHOE	開元後半 (730年頃)	開元末 (740年頃)	開元後半 (730年頃)	開元・天宝安間 (715-750年の間)		開元・天宝安間 (715-750年の間)		開元・天宝安間 (715-750年の間)	開元半ば (725年頃)	開元・天宝安間 (715-750年の間)	天宝安半 (750年頃)	(東西壁)開元半ば (730年頃)、(北壁)開元末 (735年頃)	開元・天宝安間 (715-750年の間)	開元・天宝安間 (715-750年の間)	長安3-景龍2 (703-711年)	"THE SCULPTURE OF TIEN LUNG SHAN : RECONSTRUCTION AND DATING" ARTIBUS ASIAE 27-3 (1965). "A T'ang-Period Stele Inscription Cave XXI at Tien-lung Shan" Archives of Asian Art 28 (1974-75).
鈴木潔	680-700年頃	680-700年頃	710-720年代						700-710年頃			730-750年頃				「天龍山唐朝窟編年試論」(『町田甲一先生古稀記念会編 論叢仏教美術史』吉川弘文館、1986年)。
李裕群	673-681年	673-681年	673-681年	673-681年	681-704年	681-704年	681-704年	681-704年	681-704年	681-704年	673-681年	681-704年	681-704年	681-704年	681-704年	「天竜山石窟分期研究」(『考古学報』1992年1期)。『天竜山石窟』(科学出版社、2003年。李綱との共著)。
顔娟英	中宗朝 (705-710年)	中宗朝 (705-710年)	中宗朝 (705-710年)						睿宗朝から開元初 (710-713年頃)		18窟に遅れて造営	21窟にすぐに続く(開元初)			開元初 (713年頃)	「天龍山石窟の再省思」(『中央研究院歴史語言研究所會論文集之四 中国考古学之整合研究』1997年)。
曾布川寛									開元年間 (713-741年)		8世紀初 (690-704年)	14窟よりも早い開元年間 (713-741年)			開元 (713-741年)初頃	「隋・唐の石窟彫刻」(『世界美術大全集 東洋編4 隋・唐』小学館、1997年)。
久野美樹	700年頃	700年頃							4・5窟に続く		最も遅く750年頃までには造立	最も遅く750年頃までには造立				『中国の仏教美術—後漢代から元代まで』(東信堂、1999年)。



天龍山石窟諸窟平面図

続いて、削られるものとして挙げられるのは、第十八窟である。<sup>(6)</sup>第十八窟は、ヴァンダースタツペンが、北壁と東西壁諸像の様式が異なることを指摘してから、東西壁の諸像よりも、北壁の仏像群の制作年代が、やや遅れる見方が有力である。鈴木潔氏は北壁、東西壁の形式上の相違点をいくつか挙げるのと同時に、彫刻様式について東西壁諸像を「肉体各部の起伏の変化を的確に捉え、張りのある面の抑揚として表す知的な肉付けをみることができ。」と、北壁を「第十七窟と同様に、肉の弛みをくびれの線刻によって説明し、肉付け自体は硬く単調である。」とする。そして「常識的には側壁の後ろに奥壁が削り出されたと考えられよう。」とし、東西壁諸像は七〇〇から七一〇年、北壁

は七三〇年から七五〇年頃の制作と述べられた。<sup>(8)</sup>

第十八窟東西壁の諸像は、作風から見れば、神龍二年から同三年の造立年代としても差支えなさそうだが、三世仏を発願する場合には、三壁を同時に着手しないということはある。従って、第十八窟も勿部珣將軍夫妻の造立した窟にはあてはまらないといえよう。

残すところ、第六窟、第十二窟、第十五窟、第二十窟、第二十一窟が、可能性として挙げられる。ここから、さらに絞り込むとなると、第二十窟が省かれる。

本窟は、隣接する第十九窟とともに異例の西面で窟を穿ち、西峰最西端のグループに位置する。従来の窟とは異なり、東壁を正壁として造立し、しかもわざわざ離れた場所を選択するのは、通常では考えにくい。また、顔娟英は、本窟に造立された騎獅文殊菩薩像、騎象普賢菩薩像を、華嚴思想の影響によるものとするが、造営年代が下がると思われる第九窟にも、これら特殊な二像が配されていることを考えると、本窟の造立を神龍二年から同三年にあてはめるのは、聊か疑問を感じる。

マリリン・リーの「第二十一窟説」にも賛成しがたい。第二十一窟は、第九窟を除いて石窟中最大であり、勿部珣將軍夫妻の造立規模としては相応しいが、様式的にはやや成熟しすぎていて、神龍二年から同三年には早すぎると思われる。ヴァンダースタツペンやマリリン・リーがいう天龍山石窟唐代初期の造立というよりも、他の研究者が述べるように、それよりもやや遅れた睿宗朝から玄宗朝初め頃の造立と見なしたい。

加えて立地の状況から見ても、やはり第二十一窟が勿部珣將軍夫妻の造立窟とは思えない。本窟は、第二十窟と同様、東西峰にわたった石窟中で、最も西に位置している。第二十窟のところでも少し述べたが、夫妻が初めてこの地を訪れた時、少なくとも東峰の第一窟から第三窟、第八窟と、西峰の十窟、十六窟の六窟がすでに造立されていたわけであるから、最も離れた第二十一窟の地を選定するのは、やはり不自然といえよう。残念ながら第二十一窟は崩壊寸前の窟であつたため、現在はコンクリートで門口が塞がれている。内部を確認することは、非常に困難である。

最後に、第十二窟も、勿部珣將軍夫妻の造立窟としては否定したい。本窟は、門口両側に舍利塔形の仏龕を彫り出し、しかも天福六年(九四一)をはじめ、天会五年(九六一)と天会八年(九六四)の題記を刻むという。<sup>(20)</sup>規模からすれば、窟内に本「功德記」碑を建立する余地は無さそうなので、当然窟外、恐らく門口付近に造られると思うが、これらの龕や題記があるということは、その可能性が低いと考えられるからである。

以上により、神龍二年から同三年に、勿部珣將軍夫妻によつて造立された窟、すなわち「功德記」が刻まれた碑の原所在地は、顔娟英が指摘する第六窟、李裕群が指摘する第十五窟のどちらか二窟であつたと推定したい。両者ともに、様式的には神龍二年から同三年の造立にあてはまりそうだが、どちらが該当するか、今のところ積極的な根拠を提示することはできない。碑の痕跡を重視した場合、第六窟門口西側にも、人為的に何かを削り取つた痕跡があり、気になるところではあるが、寸法を考えると、李裕群

のいう第十五窟が相応しいように思われる。さらに『金石萃編』撰者王昶の注記がいうように、碑の原所在地が「天龍寺後」であるならば、天龍寺が西峰(第十六窟あたり)に建立されたこととなる<sup>(21)</sup>と、第十五窟の位置は、概ね矛盾がないといえよう。

#### まとめ

高祖李淵は、大業十三年(六一七)、太原留守となり、この地で挙兵し唐を建国した。以後、太原は唐の礎を築いた地であるとともに、外敵を阻止する要塞地として、さらに重要視されるようになった。特に則天武后は、自分の故郷でもあつたことから、長寿元年(六九二)、晋陽(太原)を北都とし、長安、洛陽と並ぶ都に定めた。則天武后が没すると、北都の名は一時廃されるが、玄宗の時に太原府が置かれ、再び北都と称されるようになる。

朝鮮半島から唐へ渡り、軍事上の重要任務を担う地位に上りつめた勿部珣將軍、そして夫人は、神龍二年、城から数十キロ離れた石窟寺院で、造仏を発願し造像記を残した。活気に満ちた城下に比べ、荒廃しつつある石窟寺院の様子を目の当たりにした時、かつての興隆を偲ぶ思いもあつたにちがいない。

本稿では、本「功德記」の重要性を改めて確認することはできなかったが、彫刻様式からの考察には、十分に及ぶことができなかった。天龍山石窟の、独特の作風がどのように誕生したのか、外来様式の受容と発展が大きな鍵になると思われるが、これらの課題を含め、今後は復元的な考察とともに、天龍山石窟唐代窟の編年を試

みたい。

注

- (1) 拙稿「天龍山石窟の研究—研究史と問題点—」(『愛知県立芸術大学紀要』三四号、二〇〇五年)。同「天龍山石窟北斉窟に関する一考察」(『愛知県立芸術大学紀要』三五号、二〇〇六年)。
- (2) 近年、天龍山窟の聖壽寺東側の溝から、碑の断片が発見された。李裕群・李鋼編著『天龍山石窟』(科学出版社、二〇〇三年)によると、その断片は高さ四〇センチ、幅二九センチ、厚さ一八センチの寸法をした石灰岩質のもので、題字「大唐口部將軍功德記」を含め、八行ほどが刻まれている。
- (3) 『金石文字記』卷三。
- 「今、太原縣天龍寺ノ後ニ將軍名珣アリ。其氏口部ト曰ク、而シテ部ノ上一字ヲ欠スル。官ハ天兵中軍副史・右金吾衛將軍・上柱國開國公ニ至リ、其夫人黑齒氏トトモニ造像シ之ヲ記ス。其文曰ク本支ハ京(東)海ニアリ、世旧徳ヲ食ム。虞ガ臘セザルヲ相ウテ、之奇ガ族ヲアゲ太上ノ懷邦ニ行キ、由余ガ載チ格リ。蓋シ蕃將之唐ニ帰スル者ナリ。」
- (4) 『金石萃編』二、陝西人民美術出版社、一九九〇年。
- (5) 小野勝年「右金吾衛將軍勿部珣の功德記について—天龍山の百済の一帰化人—」(『史林』七一巻三号、一九八八年)。
- (6) 『潜研堂金石文跋尾』巻五。
- 「右[勿]部將軍功德記唐時并州置天兵軍[勿]部珣以右金吾衛將軍爲天兵中軍副使因造三世佛像於太原之天龍寺碑文八分書而首行郭謙光文

及書六字則篆書金石文字記闕謙光之名今據石本補之珣妻黑齒氏燕國公常之之中女常之百濟西部人而此碑亦有本枝海之語金石文字記作京海誤疑珣亦系出百濟與常之同降唐者爾碑末題景龍元年歲在鶡首鶡首於十二次屬未是年太歲在丁未也」(『石刻史料叢書乙編之十一 潜研堂金石文跋尾』二、芸文印書館、一九六八年より。但し「勿」は筆者が補った)。

- (7) 「命姚崇等北伐制」に、開元二年(七一四)の突厥侵略の前鋒總管として「右金吾衛將軍勿部珣」の名がみえる(『唐大詔令集』卷一三〇)。また、『平津讀碑記』巻五にも、このことが紹介されている。
- (8) 前掲注(5)。
- (9) Maryjin M. Rhee "A Tang Period Stele Inscription and Cave XXI at T'ien-Lungshan" *Archives OF ASIAN ART*, 28, 1974-75.
- (10) 注(9)マリリン・リーの論考よりも、十年前に発表されたヴァンダースタッペンとの共著では、第二十一窟の造営年代を景雲二年(七一)頃としている。Harry Vanderstappen・Maryjin Rhee "THE SCULPTURE OF TIEN LONGSHAN : RECONSTRUCTION AND DATING" *ARTIBUS ASIAE*, 27-3, 1965.
- (11) 前掲注(5)。
- (12) 顔娟英「天龍山石窟的再省思」(『中央研究院歷史語言研究所會議論文集之四 中國考古學與歷史學之整合研究』一九九七年)。
- (13) 李裕群の調査によると、第十五窟門口の東側に、人為的に削り盗られた亀趺上の碑の痕跡があり、その寸法は、高さ九八センチ、幅六七センチで、北京図書館所蔵の拓本の寸法と一致するという(前掲注(2)、李裕群・李鋼『天龍山石窟』)。

- 『金石萃編』の撰者王昶の注記がいう「功德記」の碑の大きさは、高さ約一三五センチ、幅約一一〇センチで、李裕群が指摘する第十五窟門口東の碑の痕跡より若干大きいと思われるが、碑全体の大きさを考えれば、全く否定するものでもなかろう。
- (14) 外村太治郎・平田鏡撮影『天龍山石窟』金尾文淵堂、一九二二年。図版第六七図と第七三図を参照。
- (15) 曾布川寛「隋・唐の石窟彫刻」(『世界美術大全集 東洋編4 隋・唐』小学館、一九九七年)。
- (16) 前掲注(14)、図版第七四図と第七八図を参照。
- (17) 前掲注(16)「THE SCULPTURE OF TIEN LONG SHAN: RECONSTRUCTION AND DATING」。
- (18) 鈴木潔「天龍山唐朝窟編年試論」(『町田甲一先生古稀記念会編 論叢 仏教美術史』吉川弘文館、一九八六年)。
- (19) 前掲注(14)、図版第七九図を参照。
- (20) 田中俊逸「天龍山石窟調査報告」(『佛教学雑誌』卷三、一九二二年)、常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第三集評解「山西天龍山」(一九二六年)、前掲注(2)、李裕群・李綱『天龍山石窟』等で紹介。なお、第二十一窟にも天福六年の題記があるという。
- (21) 李裕群は、天龍山石窟草創にあたる、皇建年間(五六〇)建立の天龍寺を、西峰の第十六窟と見なしている(前掲注(2)、李裕群・李綱編著『天龍山石窟』)。筆者もこの意見に賛成である(前掲注(1)、拙稿「天龍山石窟北斉窟に関する一考察」)。